

会 議 録

| | | | | |
|------------------------|-----|---|------|----|
| 会議名 (審議会等名) | | 令和7年度 第2回 相模原市支援教育ネットワーク協議会 | | |
| 事務局 (担当課) | | 支援教育課 電話042-704-8917 (直通) | | |
| 開催日時 | | 令和8年2月4日(水) 15時00分～17時00分 | | |
| 開催場所 | | 教育委員会室 | | |
| 出席者 | 委員 | 7人(別紙のとおり) | | |
| | その他 | 6人(別紙のとおり) | | |
| | 事務局 | 4人(松原総括副主幹、佐藤指導主事、原指導主事) | | |
| 公開の可否 | | <input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可 | 傍聴者数 | 0人 |
| 公開不可・一部不可 の場合は、その理由 | | | | |
| 議 題 | | 1 開会 2 挨拶 3 議事 (1) 第2次相模原市教育振興計画について ○令和7年度前期進行管理シート報告 (2) 本市の取組について 1 通級指導教室の充実改善に向けて 2 学校サポーター制度の拡充について 3 支援教育研究推進事業について 4 「さがそうみらい みんなでつながる アクションプラン」について (3) 協議 ○「多様性の理解」をすすめる取組とこれから 4 その他 5 閉会 | | |

議 事 の 要 旨

1 開会

2 挨拶

3 議事

(1) 第2次相模原市教育振興計画について

事務局より、第2次相模原市教育振興計画について、資料1「令和7年度 進行管理シート」に沿って説明した。

委員より以下の項目について質問及び質問があった。

【目標③施策⑩項目③切れ目のない支援の推進】

(富川委員)

4 1 番の「教育支援委員会への相談内容を学校生活に生かすための連携」について、医療的ケアの指示書の形式を幼稚園や保育園等と小学校で、今年度統一したため、連携が非常にうまくいくようになった。

医療的ケアについては、実態の把握や市民からの相談を受けるために、医療的ケア児等コーディネーターがいるので、そのような立場の方が就学相談に関する会議に参加いただくとよい。

【目標③施策⑩項目⑤医療的ケア児に対する支援の充実】

(富川委員)

5 5 番、5 6 番について、今まで医療的ケア児は小学生しかいなかったが、現在は中学生にも対象生徒がおり、修学旅行や校外学習への対応にも力を入れている。現在は地域の中学校に通っているが、高校に進学すると通学方法も問題になっていくのではないかと医療的ケア運営委員会で話題になっている。

学校におけるヒヤリハットの報告数が、昨年度までは非常に少なかった。今年度、医療的ケア日誌において、ヒヤリハット報告に係る記入欄を設定したところ、以前より多く報告が上がるようになった。それをもとに安全対策が新たに取られるようになった事例もあり、引き続き、進めていきたい。

(安藤委員長)

職員の意識にも関わるため、ヒヤリハットは小さなことでも報告するようになったほうがよい。

(宇田川委員)

ヒヤリハットについては、もっと意識をもって、多く報告する方が安全につながることを小学校長会でも呼びかけている。

【目標③施策⑨項目④県立特別支援学校との連携】

(片山委員)

県立特別支援学校との居住地交流や学校間交流の連携を図るために、啓発を進めているが、児童生徒の実態把握や支援方法等、担当者間における共通理解の課題が

未だにあると考える。

市立学校の先生方への啓発とともに、県立特別支援学校も交流するにあたって、丁寧で具体的な説明ができるよう、職員と検討を重ねていくので、引き続きお願いしたい。

(安藤委員長)

回数が限られてしまう。継続的にできるとよい。

(片山委員)

医療的ケア児も交流をという話もあり、徐々に進んできているが、それぞれの学校の日程調整等が難しい状況である。

(安藤委員長)

本来なら、学校教育の中ではなく、地域の中で交流することが、本当の意味なのではないかと考える。学校だけでなく、どれだけ相模原市民が障害を理解していて、インクルーシブな社会をつくろうとするかが大事になってくる。

【目標③施策⑧項目②障害等に関する理解促進】

(安藤委員長)

6番の「障害理解に関する理解促進」について、具体的に説明をしてほしい。

(谷畑総括副主幹)

内閣府との共催で「心の輪を広げる体験作文」や「障害者週間のポスター」の募集や展示をしている。また、障害福祉サービス事業所の自主製品販売会を本庁舎や商業施設等で行っている。車椅子バスケットボールやフライングディスク等パラスポーツの体験会を年間4、5回実施している。昨年はデフリンピック開催時には、市民から応援メッセージを選手にお渡しした。

来年は、やまゆり園の事件から10年経過するにあたり、事件を風化しない取組が必要なため、理解促進を更に広めていきたいと考えている。市民一人ひとりに障害のことを知ってもらい、ちょっとした手助けをしてもらうサポーター制度を来年度から始めたいと検討している。

内容としては、学校の場合は、動画視聴後に内容を基に話し合いをすることや個人の場合は、動画視聴後の感想報告をサポーターに認定していきたいと考えている。目標としては、10年間で、人口の約1割の7万人を考えている。ホームタウンチームとの連携や学校での取組の協力をしてもらい、進めていきたい。

(安藤委員長)

素晴らしい取組のため、これから進めてほしい。今、取り組んでいることを広げていくとともに、地域を限定して取り組むことがよい。一番重要なのは、災害時に高齢者や支援が必要な子どもがいる等、自分から「助けて」と言えない方のことを周りの人が把握していくことである。

(千谷委員)

他の自治体では、自治体独自のアプリを活用している。啓発手段として有効と感じるが、相模原市にはあるのか。

(谷畑委員)

相模原市公式 LINE を活用し、障害に関する様々な団体の講座やボランティアの募集等の情報を伝えていきたい。周知を広げるために、ホームタウンチームの試合にブースを出したり、駅前での紹介活動をしたりすることを考えている。

(富川委員)

障害者のサポーター制度とスクールサポーターとの連携について、スクールサポーターをしていれば、講習を受けずに、登録できるような制度はあるのか。

(谷畑委員)

サポーター制度は色々あるので、それらのサポーターとも連携をしていければよいと思う。

(西内支援教育課長)

当課でも会計年度職員の学校サポーターや非常勤介助員の募集をしているので、登録面接の時に、例えば障害者サポーターの講座受講状況を知ることができるように。相模原市にも「すもー」というスマートフォンアプリがあるので、連携できるとよい。

(安藤委員長)

正確な障害理解というのが大事なキーワードになってくる。障害だけに焦点を当てないで、その地域で行われているみんなが参加するイベントという示し方で、ナチュラルなサポートにしていく方法でお願いしたい。

(2) 本市の取組について

1. 通級指導教室の充実改善に向けて

事務局より、通級指導教室の充実改善に向けてについて、資料2に沿って説明した。

(宇田川委員)

通級指導教室の増設が進んでいくことはよい。一斉指導に苦しさを感じている子どもが、個別で「社会で生きる力」を育てる場所があるのはありがたい。

ただし、専門の場所が増えることで、通常の学級の担任が「通級指導教室に任せればよい」と思ってしまわないか懸念している。通常の学級の担任も、支援の力をつける必要がある。

(安藤委員長)

巡回指導の教員には、通常の学級の教室に入ってほしい。担任が支援の方法を学ぶ方が効果的だ。1対1の状況であれば、子どもも課題に取り組むことができるが、通常の学級の多人数の中で適応できない時にどうするか、そこが本当の通級指導教室の教員の専門性が活かされる場面である。教育の構造自体を変えなければいけない時期に来ている。

(西内支援教育課長)

小学校への早期支援という意見を反映し、まずは小学校で巡回指導を実施してい

く。巡回校の通級人数により、設置校にしていくステップを考えており、増設の方向で考えていきたい。また令和 11 年度開校予定の「学びの多様化学校」の通級指導教室担当教員が地域に巡回できる仕組みも検討中である。

2. 学校サポーター制度の拡充について

事務局より、学校サポーター制度の拡充について、資料 3 に沿って説明した。

(安藤委員長)

関係各課と連携する方向で進めてほしい。

3. 支援教育研究推進事業について

教育センターより、支援教育研究推進事業について、資料 4 に沿って説明した。

(安藤委員長)

大学でのピアサポート実践を通じ、教員が一人ひとりに個別配慮することの限界を感じてきた。お互いに助け合う土壌が必要だが、大学からでは間に合わない。小学校・中学校の段階から、正確な知識を習得する取組が必要だ。

今回、中学生のアンケートで「障害があるから助けるのではなく、自分自身を理解することが必要なのだと分かった」という声が多く寄せられたことが嬉しい。みんなが自己開示し、話しやすい社会を作る第一歩になる。旭中学校の取組は、今後さらに発展させる価値がある。

(日戸副委員長)

旭中学校の実践と、本学での取組には共通点が多く驚いた。相模女子大学では、特別支援学校高等部を卒業し就労している若者を対象とした「サードプレイス」としての大学活用プログラムを 5 年継続している。これは文部科学省の委託を受け、相模原市と連携しているものである。

プログラムの第 1 ステップは「パーソナルポートフォリオ」による自己理解。第 2 ステップは「私のトリセツ」を用いた困りごとの共有である。知的障害のある若者と大学生がフラットな関係で交流する中で、大学生側にも変化が見られる。最近の若者は周囲に気を使い、本音を言うのが苦手だが、知的障害のある若者の飾らないコミュニケーションに触れることで、大学生も本音を語れるようになる。一部では個人的に出かけるほどの深い関係も築かれており、当事者が職場のストレスを仲間に相談して解決するなどの好事例も出ている。

(富川委員)

個別最適な教育環境もあるが、やはりインクルージョンで、実際には色々な子どもがいることを小さい頃から理解していかないと難しいと感じた。教育現場で共生社会を目指した取組をするためには、保護者もそのようなことを理解してもらうことが大切なので、社会全体が変わっていく必要がある。

(安藤委員長)

学校の先生の努力や研修で対応するというものではなく、教育課程そのものを変

えていく必要がある。

4. 「さがそうみらい みんなでつながる アクションプラン」について

教育相談課より、支援教育研究推進事業について、資料5に沿って説明した。

(千谷委員)

学びの多様化学校の目指すものを再確認したい。他の自治体では「地域の学校に戻るための場所」という位置づけが強く、子どもが追い詰められるケースもある。子どもが自分らしくいられる場所として機能させてほしい。

(折原教育相談課長)

不登校児童生徒全てを集めるわけではなく、選択肢の一つとして整備する。

(宇田川委員)

この学校ができることは喜ばしいが、南区や緑区からだと「行ってみたいけど、いけない」という子どももいると思うので、この取組が広がるとよい。

(富川委員)

来年度から不登校児童生徒が健診を受けられるようになった。また、5歳児健診は、学びの場を分けるためのものではなく、まず本人たちの困り感に気づき、療育へのつながりやその気づきをもとに、生活がしやすいようにすることが目的である。

(日戸副委員長)

学びの多様化学校は「センター機能」ではなく「モデル開発」であってほしい。ここで培ったノウハウや考え方を、市内の全校に広めていくことが重要だ。

(安藤委員長)

本日は、議事を進める中で、多様性の理解について委員の方々の実践や多くの意見をいただくことができた。本日の内容を生かし、引き続き、市内での取組を広げていくことが望まれる。

6 閉会

令和7年度相模原市支援教育ネットワーク協議会委員出欠席名簿

| | 氏名 | 所属等 | 備考 | 出欠席 |
|---|--------|-------------|---------------------------------|-----|
| 1 | 安藤 正紀 | 学識経験者 | 玉川大学 学生支援センター 障害学生支援コーディネーター | 出席 |
| 2 | 日戸 由刈 | 学識経験者 | 相模女子大学 人間社会学部 人間心理学科 教授 | 出席 |
| 3 | 富川 盛光 | 医師 | 相模原市医師会代表 | 出席 |
| 4 | 千谷 史子 | 公認心理師 | こども広場 ワンダーステップ所長 | 出席 |
| 5 | 片山 葉子 | 神奈川県立特別支援学校 | 神奈川県立 相模原中央支援学校校長 | 出席 |
| 6 | 宇田川 真美 | 市立小学校長会 | 相模原市立 緑台小学校校長 | 出席 |
| 7 | 森本 康子 | 市立中学校長会 | 相模原市立 内出中学校校長 | 欠席 |

<オブザーバー>

| | | | | |
|----|--------|---------------------------------------|-----------|----|
| 8 | 奈良 美幸 | 健康福祉局 地域包括ケア 推進部 高齢・障害者福祉課 | 課長 | 出席 |
| 9 | 栗山 稔 | 健康福祉局 地域包括ケア 推進部 福祉基盤課 | 参事(兼)課長 | — |
| 10 | 山本 克哉 | こども・若者未来局 こども家 庭支援部 陽光園 | 所長 | — |
| 11 | 井出 洋子 | こども・若者未来局 こども家 庭支援部 中央子育て支援センター | 所長 | — |
| 12 | 土元 健一郎 | こども・若者未来局 こども・若者政策課 | 課長 | — |
| 13 | 櫻井 敏朗 | こども・若者未来局 こども・若者応援課 | 課長 | — |
| 14 | 風間 大祐 | こども・若者未来局 保育課 | 課長 | — |
| 15 | 加藤 千恵子 | 市 民局スポーツ推進課 | 課長 | — |
| 16 | 今野 裕之 | 教育局 生涯学習部 生涯学習課 | 課長 | — |
| 17 | 馬渡 加能 | 教育局 教育環境部 学校保健課 | 課長 | — |
| 18 | 加藤 雄二 | 教育局 教育環境部 学校施設課 | 参事(兼)課長 | — |
| 19 | 菅原 勝 | 教育局 学校教育部 学校教育課 | 参事(兼)課長 | 出席 |
| 20 | 農上 勝也 | 教育局 学校教育部 教職員課 | 課長 (事務取扱) | 出席 |
| 21 | 北村 綾 | 教育局 学校教育部 教育センター | 参事(兼)所長 | 出席 |
| 22 | 折原 奈帆 | 教育局 教育相談課 | 課長 | 出席 |
| 23 | 西内 一裕 | 教育局 支援教育課 | 課長 | 出席 |